

外国ルーツの人々と子どもたちの未来を みんなで考える

～外国ルーツの子どもが豊かな可能性を実現できる共生社会とは～



はじめに

日本財団は、長く海外において日本語教育や日系人に対する支援活動を行っており、国内においても、貧困や家庭環境、難病など、さまざまな原因で困難を抱える子どもたちに対する支援活動を行っています。

現在、日本では少子化が進む一方、外国人労働者の受け入れ拡大に伴い、外国籍の中長期在留者は約300万人に急増しています。そのような中で、「外国ルーツの人々と共生しながら、みんなが多様な可能性を発揮できる社会を築く」という視点が不可欠ですが、特に外国人が散在している地域には、問題が山積しており、支援も限られています。今後はNPOが地域コミュニティや学校、家庭と連携し、新しい技術や仕組みを取り入れ、問題解決を進めていくことが重要です。

そこで日本財団では、外国ルーツの人々の現状と日本における共生社会について「前編」と「後編」に分け、全7回のウェビナー及び特別フォーラムを開催しました。

「前編」では、日本で暮らす外国ルーツの人々の現状と課題について、「多文化共生」「交流」「労働と雇用」「医療」「日本語」をテーマに専門家から学び、質問できる機会を設けました。

「後編」では、外国ルーツの子どもとその家族に焦点を当て、抱えている課題や、ポストコロナ・デジタル変革時代の共生社会を見据え、子どもたちが豊かな可能性を実現できる「未来」と「学び」を、一緒に理解を深め、考える場を設けました。また、特別フォーラムでは外国ルーツの子どもとして日本で育ったゲストを招いて、それぞれの方の経験談を踏まえ「子どもたちの学びと未来のために、私たちにできること」を考えました。

今回のウェビナーとフォーラムが、多くの方々にとって、日本型の多文化共生社会を考え、行動する一助となることを願っています。

開催データ(計8回)

- 当日参加者数：2,301人
- アンケート回答者数：1,720人
- 参加満足度：94%
- 質問数：410件

CONTENTS

外国ルーツの人々の「今」と共生社会を考える

前編

- | | | |
|-----|--|-----|
| 第1回 | Withコロナ時代の多文化共生、地域に求められる支援 | P2 |
| 第2回 | 多文化共生社会に向けた交流～これからの在り方について考える～ | P4 |
| 第3回 | 日本で働く外国人と雇用の課題 | P6 |
| 第4回 | 外国ルーツの人々と健康、一医療従事者にできること「やさしい日本語」の普及と医療者教育 | P8 |
| 第5回 | 地域における日本語と学び | P10 |

外国ルーツの子どもと家族について深く考える

後編

- | | | |
|-----|---------------------|-----|
| 第1回 | 外国ルーツの子どもの未来を支えるために | P12 |
| 第2回 | 外国ルーツの子どもの学び | P14 |

特別フォーラム

外国ルーツの子どもたちの学びと未来を、経験談を交え、みんなで考えませんか

P16

[本ウェビナー・特別フォーラム運営 担当職員]



左から神谷圭市、野村拓馬、中井知佳、羽鳥加苗

第1回

Withコロナ時代の多文化共生、
地域に求められる支援

開催日時:2021年9月18日(土) 14:00 ~ 16:00 参加者数:258人

講師:田村太郎 さん
(一財)ダイバーシティ研究所 代表理事

阪神・淡路大震災を機に長年、多文化共生に取り組まれてきた、ダイバーシティ研究所代表理事の田村太郎さんをお招きし、今、日本で暮らす外国ルーツの人々がどのような状況にあるのか、日本社会で直面する課題やコロナ禍で生じた変化、地域で求められる支援などについて、学びました。



講演内容

日本に住む外国ルーツの人々
～進む3つの多様化～

日本には現在、約300万人の外国籍の人々が暮らしています。田村さんは3つの多様化というキーワードから、単に「300万人の外国人がいる」と捉えるのではなく、日本には多様な国籍、在留形態、世代・年代別にさまざまな背景をもつ人々が暮らしているという認識をもつことの重要性についてお話しをされました。

「3つの多様化」が進行

1. 国籍の多様化

中国、韓国・朝鮮、ベトナム、フィリピン、ブラジル、ネパール

国籍が異なると、言語や文化、習慣、法制度も異なる

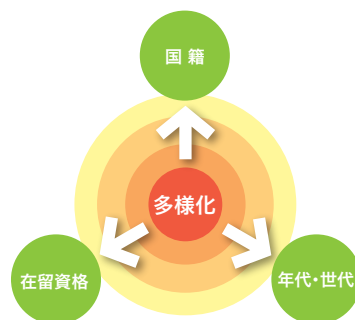
2. 在留資格の多様化

在留資格によって日本でできる活動が異なる

3. 年代・世代の多様化

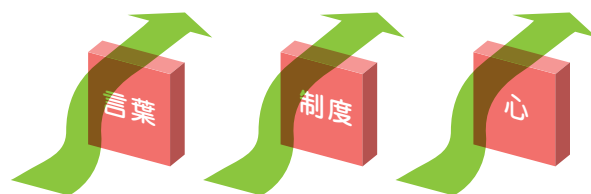
3世代前から日本で暮らす世帯も、昨日来たばかりの世帯も「外国人」

家族呼び寄せや本人の高齢化により、福祉ニーズの多様化も進展

多文化共生に向けて、
立ちちはだかる「3つのカベ」

多様化する外国ルーツの人々はどのような困難を感じているのでしょうか。田村さんは、外国人労働者は認めない建前で、日系人や技能実習生などを例外的に受け入れてきた経緯に触れ、建前と実態との乖離によって外国ルーツの人々と日本人の間に言葉、制度、心の面で「3つのカベ」があると説明されました。例えば、子どもの教育

では、日本語がわからず、プリントが読めないといった問題から、独特の日本語(うわぐつ、面談など)が理解できないなど言葉のカベが生まれるほか、母国と異なる日本の教育制度、子育て文化や宗教のちがいといった制度のカベに戸惑うことも少なくありません。さらに、保護者や児童は情報を得られないことで孤立し、不安や不信感をもつなど、心のカベも生まれます。「言葉のカベだけでなく、制度のカベと心のカベも低くする取り組みが必要」ということを学びました。



コロナ禍で 顕在化した問題

新型コロナウイルスの感染拡大により、もともとあった外国ルーツの人々の「脆弱性」が顕在化していることについてもお話されました。コロナ禍で感染防止策や支援施策が複雑で情報や日本語支援が届かず生活困窮になるケースや、「雇用の調整弁」として真っ先に契約を打ち切れ、本人の帰国も家族の入国も困難で、孤立のスパイラルに陥ってしまうケースに触れながら、具体的な解決策の検討を急ぐことが必要であると述べられました。一方で、コロナ禍で半ば強制的に移行した新たな技術の可能性についても言及され、ICTやAIを活用し社会的少数者の職場や地域への参画につなげることで、これまで排除されがちだった人を包摂する社会を創出する「日本型・ダイバーシティ社会」が可能になるとの展望も語られました。

外国ルーツの人々が 直面する課題の解決に向けて

田村さんからは、「これまでの社会に人を適応させるのではなく、社会そのものを変化させる。従来の枠組みにこだわらずに、今できることを今すぐやろう」というメッセージをいただき、いま地域にいる人を大切にすることが未来につながるという視点、私たちがまずは自分の周囲からできることを考えることの大切さを学んだ貴重な講演となりました。

講演のポイント

3つの視点で地域を点検し、多文化共生の取り組みを進めよう！

視点 1

あってはいけない
ちがいをなくす

- 外国人であるという理由で日本人との待遇面での差別をしない
- 多言語に翻訳したり通訳を交え、外国人にも重要な情報が伝わっていることを確認する

視点 2

なくてはならない
ちがいを守る

- 文化や習慣、宗教などのちがいに配慮し、必要に応じ施策や取り組みを見直す
- 家族へのサポート、キャリアアップに対する考え方など、配慮して欲しいことについてよく話しあい、認識のズレを調整する
- 多様化する外国人の現状を正しく認識し、十把一絡げに評価しない

視点 3

ちがいを活かし合う
地域を育む

- 非言語コミュニケーションのちがいにも留意し、不快に感じるふるまいについて互いに知る機会を設ける



参加者の反応

- 自分が住む地域とのつながりについて関心が湧き、何か取り組めることがないか調べてみたいと思う。
- 「事実に基づいたコミュニケーションをとること」を常に意識しながら支援活動に取り組んでいきたい。
- この様なお話、人権問題などは中高生にもっと聞いてほしいと感じる。
- ウェビナーに関して自宅から気軽に参加でき、良かった。

第2回

多文化共生社会に向けた交流
～これからの在り方について考える～

開催日時:2021年9月26日(日) 14:00～16:00 参加者数:226人

講師:杉本 香 さん
大阪大谷大学 准教授

大学で日本語教師養成について取り組まれている、大阪大谷大学の杉本香さんをお招きし、多文化共生社会に向けた交流をテーマに、交流イベントの課題や、杉本さんが実際に取り組まれた実践、交流のポイントなどについて、学びました。



講演内容

在留外国人の方々の意識

杉本さんからは、在留外国人に対する基礎調査をもとに、在留外国人の方々の意識についてお話がありました。日本人と付き合いがある在留外国人層は、付き合いがない層に比べ、生活環境全般の満足度が高いということ、また日本人との付き合いがない理由としては、「言葉が通じないこと」、「付き合う場やきっかけがない」ことが半数近く占めているといった調査結果が実際に報告されています。

[在留外国人の方々の意識]

●交流について

- ・日本人と仲良くなるのが難しく、日本で暮らしていると孤独に感じる。
- ・特に学生ではない場合、会社以外に所属感を感じられるのが少し難しいと思い、外国人でも参加できるコミュニティなどがいろいろあったり、すでにあるとすればより手軽い方法などがあれば良いと思います。
- ・外国人と日本人の文化交流やイベント活動を多く作り、日本人の生活様式を体験したい。

【在留外国人の方々の意識】出典:出入国在留管理庁(2021.02)「令和2年度在留外国人に対する基礎調査報告書」

●人種差別・機会平等・個人尊重について

- ・まず差別せず、平等に見てほしい。
- ・外国人にもっと関心を持ち、そして外国人を蔑視しない。

●日本人への情報提供について

- ・日本人は外の世界、他文化と社会形式について、もっと知る必要がある。
- ・日本に住む移民や外国人の異なる伝統や文化について、日本人が学ぶのも良いかもしれない。

交流イベント開催に
向けての課題

交流を求める声がある中で、具体的なイベント開催に向けて、どういった課題があるのでしょうか。杉本さんは、交流イベントの主催者からの聞き取りや、ご自身での経験から、交流イベントにおいて、「方法の課題」、「広報の課題」、「参加者の課題」の3つの課題があるとお話しをされました。

方法

広報

交流イベントの
3つの課題

参加者

交流イベント開催に向けての課題

方法の課題：交流パーティのやりっぱなしで終わりではだめ（自己満足で終わらせない）

広報の課題：どこまで広報が届くのか（本当に届けたい人に届いているか）

参加者の課題：
・無関心層をどのように引き込むか
・交流に参加する、参加できる人は限られている
・参加者のアクセスの問題
・地方での課題（例：高齢者と若い技能実習生）

大学での杉本さんの実践

杉本さんが実際に大学や地域で行われた取り組みのうち3つをご紹介します。いずれの実践でも、目的と目標が明確に設定されているとともに、日本人学生と外国ルーツの学生、日本人住民・学生と外国人住民といったように、互いの「協働」を引き出すような設定がなされていました。杉本さんの大学生に対する、「得た知識を実践に移してかかわってほしい」という願いや想いが、どの実践にも組み込まれていると感じました。

実践①⇒外国ルーツの生徒とのデジタル・ストーリーテリング協働制作

実践②⇒地域日本語教室との連携による交流会「ご近所の外国人と交流しよう！」

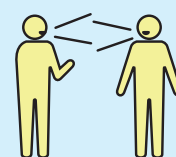
実践③⇒複言語複文化脱出ゲーム開発プロジェクト

👉 講演のポイント

交流を行う上で大切なポイント

最後にこれまで、さまざまな交流会を実施された杉本さんから、交流会を行う上で大切なポイントをお聞きました。杉本さんが挙げられた「外国人住民がイベントの企画から参加する」、「一方的でなく、双方向」といったポイントは、主催者や特定の人だけにスポットを当てたものではなく、参加者全員がイベントの主役になるためのポイントだと感じました。交流会やイベントを行う際は、その内容に注力されがちですが、少し立ち止まって交流会の本当の目的や、在り方について考えさせられる貴重なウェビナーとなりました。

- 多くの人にイベント開催情報を届ける
- 関心のない人たちを巻き込む
- 他機関・団体と連携／協力する
- 対等な関係で「出会う」場を多くつくる、継続する
- 外国人住民がイベントの企画から参加する
- 一方向でなく、双方向／同じ方向を見て協働で行う
- 3Fから一歩進んだものを考える（3F：ファッション、フード、フェスティバル）
- 直接対話する
- 「やさしい日本語」を使う（多言語使用や互いの言語を学び合うものも）



🗨️ 参加者の反応

- 幼少期からの異文化交流や多様性への出会いの大切さ、そのための取り組みなどについて考えていかなければならないと感じました。（学生）
- 個人的にもイベントを開いてみたいなどとさまざまな活動例をお聞きして、勇気づけられました。（東京都、NPO関係者）
- これからは周囲に外国人の方がいることが当たり前の世の中になっていくと思いますし、このような意識を持った子どもたち、大学生が社会のさまざまな場面でその知見を活かしてしてくれると良いと感じました。（海外、日本語教育関係者）

第3回

日本で働く外国人と
雇用の課題

開催日時:2021年9月29日(水) 18:00 ~ 20:00 参加者数:201人

講師:上林 千恵子 さん
法政大学 社会学部名誉教授

「労働」をテーマに長く研究されている、法政大学の上林さんをお招きし、「日本で働く外国人と雇用の課題」をテーマに、日本における外国人労働者の現状や、雇用の課題、地域社会での課題などについて、学びました。



講演内容

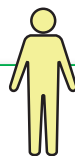
外国人労働者の推移

外国人労働者数の推移については、2008年と2020年の外国人労働者数を比較すると、2008年は486,398人であるのに対して、2020年では1,724,328人に伸び、ほぼ3.5倍に増大しています。また、在留資格に注目すると、資格外活動と技能実習の伸び率が大きいものの、すべての在留資格で増加傾向にあるという状況にあり、永住者数については、2008年で92,441人でしたが2020年287,009人となり、ほぼ3倍に増加しています※。

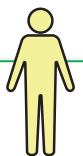
※厚生労働省(2020)『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ』より

技能実習生・日系人労働者の
雇用の課題

外国人雇用の課題として、特に技能実習生、日系人労働者に焦点を当てた説明がありました。以下には、上林さんがお話しをされた内容の中でも、主な課題を掲載しましたが、これ以外にも課題は山積しています。私たちの身の回りにも、多くの外国人労働者の方がいます。問題を「外国人労働者の問題」として、自身と切り離して考えるのではなく、「私たちが生きている社会で起こっている問題」として、目を向ける必要があると強く感じました。

技能実習生の
雇用の課題

- 制度目的と実態にずれがあること
制度の目的：周辺国への技術移転
現 状：技能実習生を労働者の方向へ
近づける動きがある
- 労働移動の自由がないこと
技能実習生の場合、3年間同じ職場・職種で
働くことが前提
- 技能実習生の失踪の問題

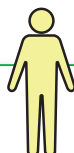
日系人労働者の
雇用の課題

- 日系人労働者の雇用の課題
- 派遣・請負職種への外国人労働者の固定化
定住化し、引退した老後の生活保障の問題
- 産業・職種の偏り
国内労働者が集まらない職種に外国人労働
者を導入している

技能実習生と日系人労働者の地域社会への統合の困難点

また、地域社会への統合の難しさについても語られました。技能実習生の場合は、制度によるものと、技能実習生の生活スタイルによる難しさがあります。特に生活スタイルによるものでは、出費を抑えるために外出を控えるといったことが、地域社会との接点につながらない原因になっているといったお話もありました。労働面での課題が、外国人労働者の方々の地域社会での生活にも深刻な影響を及ぼしていることがわかり、受け入れ国側の責任を改めて認識する機会となりました。

技能実習生の場合



地域社会への技能実習生の統合は限定的

- ①制度上、地方自治体が実習生の情報を把握できない
- ②小零細企業が受け入れ中心のため自治体の産業政策の対象外
- ③技能実習生が同国人どうして集まり、事業主も地域社会との接触を勧めない
- ④技能実習生も外出するとお金がかかるため、休日なども宿舎で過ごすことが多い

日系人労働者の場合



- ①派遣・請負労働者のため、生活に対する長期の見通しが立てにくい
- ②勤続年数が短く、転居が多い
- ③ブラジル人コミュニティを形成
地域社会との接点が少ない
- ④来日時に定住化するかどうか決めていない

外国人受け入れを前提に日本社会の在り方を考える

最後に、外国人受け入れを前提としていない日本社会から、外国人受け入れを前提とした日本社会にこれから私たちが変えていかなければいけないというお話とともに、特に外国ルーツの子どもたちの問題が日本の将来と結びついているというご指摘がありました。今回のウェビナーでは、外国人労働者の方々の現状の課題を知るきっかけになるとともに、労働という側面から、これからの未来を担う外国ルーツの子どもたちのために、私たち一人ひとりに何ができるか考えさせられる時間となりました。



参加者の反応

- 技能実習生が地域の一員として受け入れられることで地域の活性化につながってほしいと思いました。（団体職員）
- 状況の改善は一筋縄ではいかない難しさがあるかと思いますが、相互によってよい環境や体制になるよう、企業や個人、団体が協力していけたら良いなと思います。（東京都、NPO職員）
- 報道などのセンセーショナルなことだけではなく、実態を知る努力をしたいと思います。私たち自身がどんな社会にしたいのか、ビジョンを持つ必要も感じました。（ボランティア）

第4回

外国ルーツの人々と健康、一医療従事者にできること「やさしい日本語」の普及と医療者教育

開催日時:2021年10月10日(日)

14:00 ~ 16:00

当日参加者数:157人

講師:武田裕子 さん

順天堂大学医学部医学教育研究室 教授



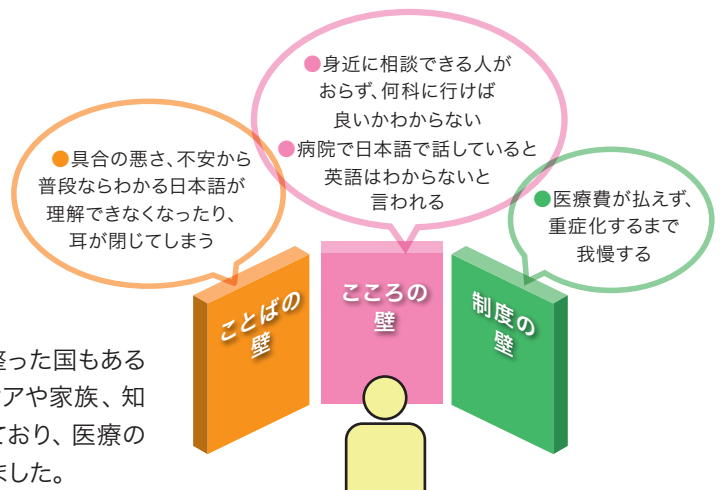
大学で医学部生の指導や、医療現場における「やさしい日本語」の普及に取り組まれている、順天堂大学の武田裕子さんをお招きし、外国人診療の難しさや、健康を左右する健康の社会的決定要因、医療現場での「やさしい日本語」の活用方法などについて、学びました。



講演内容

外国人診療の難しさ
3つの壁

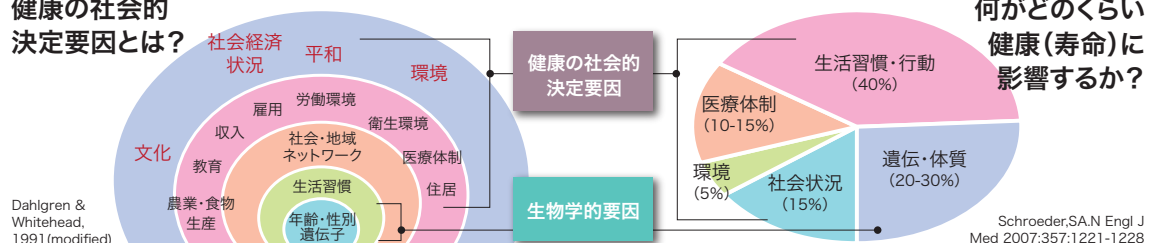
武田さんは、在留外国人と日本人の間には「ことばの壁」、「こころの壁」、「制度の壁」の3つの壁があるとお話になり、医療現場における事例について説明されました。制度の壁については、海外の多くの国では、医療通訳者をつける制度や、医療通訳者がきちんと雇用され、身分が保証されている環境が整った国もある一方、日本の場合は、善意のボランティアや家族、知り合いによる通訳が当たり前に行われており、医療の質にも影響しているといったお話がありました。



健康の社会的決定要因

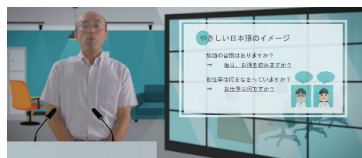
滞在資格により健康保険に加入できないといった社会的背景で、医療へのアクセスや治療の受けやすさ、病気やけがの生じやすくなる状況を健康格差と言い、その原因を「健康の社会的決定要因(SDH: Social Determinants of Health)」と言います。具体的には、生活習慣や社会・地域ネットワーク、労働環境などのほかにも、さらに大きな概念として、社会経済状況や文化、環境、平和などもあります。外国ルーツの方々が抱える課題について考える際、「健康の社会的決定要因」という視点を持つことで、その方が置かれている状況を多角的に把握するとともに、その方自身をより深く理解することにつながるのではないのでしょうか。

健康の社会的決定要因とは？

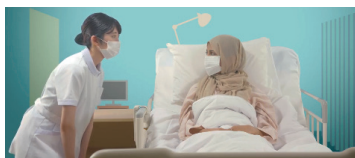


やさしい日本語

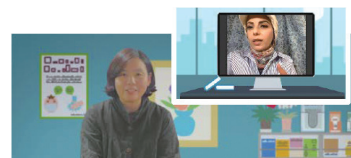
武田さんが取り組まれている医療現場に「やさしい日本語」を広める活動についても説明がありました。「やさしい日本語」は、相手に合わせて、わかりやすく伝える日本語を指し、日本語を母語としない方、高齢者、障がいのある方など、さまざまな方に用いられています。武田さんは、学生と一緒に参加した支援団体の活動の中で、医療相談を依頼された際に、どのようにコミュニケーションを取れば良いかと考え、学んだのが「やさしい日本語」との出会いだったとお話がありました。そして、東京都外国人新型コロナウイルス生活相談センターに報告のあった事例から、PCR検査を「やさしい日本語」を用いて行う動画を作成されました。また、東京都と大学との共同事業として、外国人診療に役立つ「やさしい日本語」の動画教材も作成されています。



日本語専門家によるミニ講義
●「やさしい日本語」の基礎
●「やさしい日本語」のコツ



さまざまな臨床場面での
「やさしい日本語」を用いた会話例



外国人の医療体験インタビュー

講演のポイント

「やさしい日本語」のコツ

武田さんが活動されている、医療×「やさしい日本語」研究会では、「やさしい日本語」のコツとして10のポイントを示しています。医療現場では、擬音語や擬態語といったオノマトペは診断の上でとても役立ちますが、外国人の方は聞いたことがないため、わかりづらいということや、綿棒や包帯といった物の名前については、実物を見せると理解されやすいとの説明がありました。実際に医療現場での診察と、未来の医療従事者の育成に携わられている両方のお立場から、外国人の方を取り巻く医療の現状についてお話をされ、大変貴重なウェビナーとなりました。

「やさしい日本語」のコツ

- ① 話し出す前に整理する
- ② 一文を短くし、語尾を明瞭にして区切る（「です」、「ます」で終える）
- ③ 尊敬語・謙譲語は避けて、丁寧語を用いる
- ④ 単語の頭に「お」をつけない（可能な範囲で）
- ⑤ 漢字よりも和語を使う（例「飲酒の習慣がある」⇒「いつもお酒を飲む」）
- ⑥ 外来語を多用しない
- ⑦ 言葉を言い換えて選択肢を増やす
- ⑧ ジェスチャーや実物提示
- ⑨ オノマトペは使わない（オノマトペ：状態や感情、動物の鳴き声や物音などを象徴的に表した語。医療現場では、痛みを表す「ガンガン」「ズキズキ」「ヒリヒリ」など）
- ⑩ 相手の日本語力が高い場合は「やさしい日本語」をやめる

ちょっとしたコツ・
心がけで外国人にも
わかりやすく
伝えられる

医療機関の会話も
「やさしい日本語」で
伝えられることは多い

参加者の反応

- SDHという言葉は知りませんでしたが、日ごろ外国人と接していて、感覚的にはとても腑に落ちるものでした。また、相談相手がいることが、経済的に恵まれていることより、大きな影響力があることがわかり、日ごろの活動に責任を感じました。（大阪府、通訳）
- 外国ルーツの方々に接する時だけでなく、患者さんひとりひとりの背景に関心を持ち日々の看護やケースワークにあたりたいと思いました。（山梨県、医療従事者）

第5回

地域における
日本語と学び

開催日時:2021年10月16日(土) 14:00 ~ 16:00 当日参加者数: 188人

講師:樋口尊子 さん

NPO多言語・多文化サポートICHI 理事長



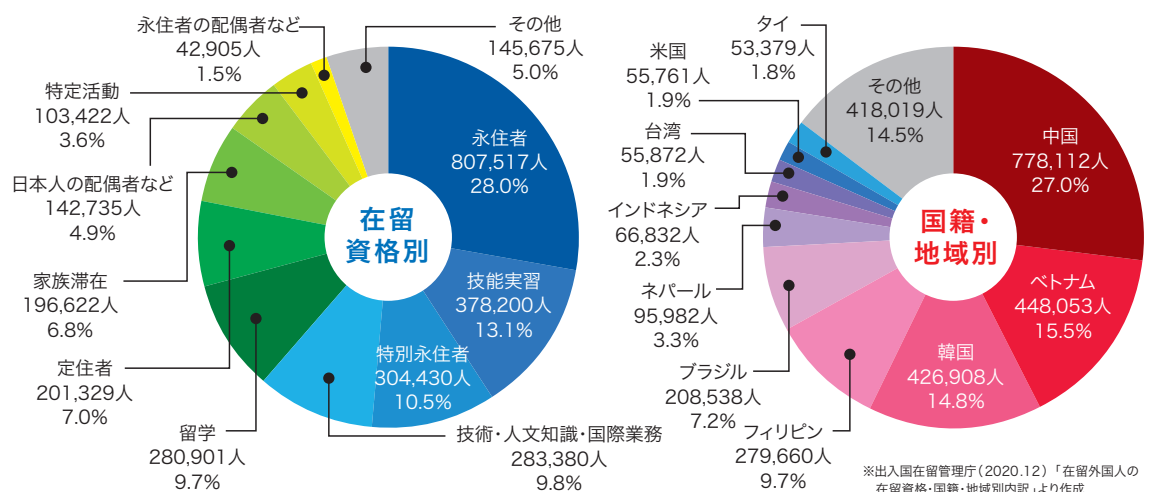
中学校や日本語教室で、地域に根付いた支援に取り組まれている、NPO多言語多文化サポートICHIの樋口尊子さんをお招きし、地域日本語教室や、樋口さんの地域での取り組み、それぞれの現場での「日本語と学び」に関する問題点などについて、学びました。



講演内容

どんな外国ルーツの人々が
日本に暮らしているのか

日本に住む在留外国人数を国籍・地域別にみると、中国、ベトナム、韓国が約半数を占めていますが、そのほかにも、フィリピン、ブラジル、ネパール、インドネシアなど、多国籍であることがわかります。在留資格別に見た際、留学という日本語を専門に勉強している人は、実は全体の1割しかいないため、さまざまな背景の方々の生活の基盤となる地域での支援や、地域日本語教室の必要性が読みとれるのではないかといったお話がありました。

それぞれの現場での
「日本語と学び」にかかわる問題点

樋口さんのこれまでの活動経験を通じて感じた、それぞれの現場での「日本語と学び」に関する問題点として6つのテーマと、各テーマでの現場からの声の紹介がありました。「外国人労働者」と「日本人社員」、「外国人保護者」と「保育者・教員」など、それぞれの立場から実際の声のご紹介があり、さまざまな立場の方が抱えている思いや悩み、問題を再認識する機会となりました。樋口さんからは、現場は問題ばかりではなく、楽しくうまくいっている場合もあるが、どこにでも一定の問題点はあるため、それぞれの現場がこのような問題を抱えているということは、ぜひ知っておいてほしいといったお話がありました。

【保育者・教員】

- 保護者に対して—
- 日本語が通じない
(通訳が頼める体制が整っていない、急な対応には通訳がない)
- 日本語が勉強できる場所を伝えたが行っていないようだ
- 子どもに対して—
- 落ち着きがない、集中力がない、言葉のせい?それとも...
- お友だちとトラブルが多いな
- ちゃんと日本語で話しているのに点数が悪いな
- すぐにあきらめてしまう
- 将来のことを考えてほしい
- 保護者と子どもに対して—
- 他の業務もあるため、100%サポートすることは難しい
- どこまでわかっているのか、わかっていないのかわからない

【外国人保護者】

- 子育て(と仕事)が忙しくて勉強する時間が確保しにくい
- 質問はできても聞き取ることができない(特に敬語が難しい)
- 毎日子どもの持ち帰る手紙を頑張って読んでいる
- 子どもの勉強を見てやりたいが、難しい
- 先生は忙しそうだから遠慮してしまう
- 先生方は熱心してくれるので感謝しているが、その気持ちを日本語でうまく伝えられない

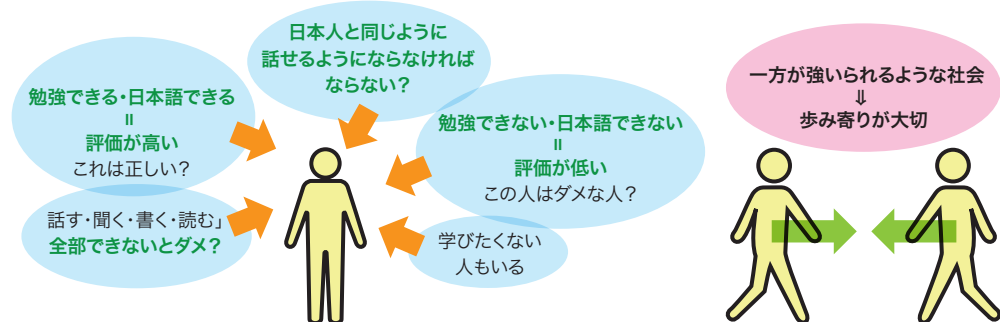
【子ども】

- 頑張っているつもりだけど...
- わたしは勉強にかたがた
- 言いたいことが全部言えていない



かならずしも日本語を 学ばなければならない?

樋口さんは、これまでの現場での「日本語と学び」を踏まえて、「勉強や日本語ができる＝評価が高い」、「勉強できない、日本語ができない＝評価が低い」というように考える傾向が、特に職場などで高いといったお話がありました。また、「話す・聞く・書く・読む」のすべてを完璧に習得することを求めるのではなく、その人に応じて、伸ばすべき能力と一緒に考えるような、双方の歩み寄りが大切だといった説明もありました。樋口さんのお話を通じて、これからの多文化共生社会の中でも重要になる、お互いの思いを大切にするための「歩み寄り」について、皆様と一緒に考える貴重な時間となりました。



講演のポイント

【理想の地域の学びに必要な要素】

- さまざまなことを知り、学ぶことができる
- さまざまな人とつながることができる
- 安心して参加ができる
- 活動を楽しみに思える
- 多くの学びの提供がある
- 学ぶ機会と場所がある
- 「私」が活躍できる
- 地域とのつながりがある

参加者の反応

- 地域日本語教室に興味はあるのですが、教える立場ではなく、一住民として参加したいけどそれで良いのだろうか、と考えていました。今回、このセミナーを受講し、そんなに気張らず参加してみようと思えました。(沖縄県、日本語教育関係者)
- 外国ルーツの方々の複雑な問題に加え、教師とボランティアに対する世間の見方にもさまざまあると想像します。自分には全く関係ないと考えている人にも今後、関心が広がっていくと良いなと思うと同時に、自分も少しだけでも貢献できれば良いなと思いました。(海外、日本語教育関係者)
- 日本語を学ぶ外国人の気持ちに寄り添った立場からお話をされて、気づかされることがたくさんありました。(神奈川県、学校関係者)

第1回

外国ルーツの子どもの
未来を支えるために

開催日時: 2021年12月8日(水) 18:30 ~ 20:00 参加者数: 304人

講師: 小島祥美 さん

東京外国語大学 多言語多文化共生センター長
世界言語社会教育センター准教授

講師: 富本潤子 さん

(公財) かながわ国際交流財団職員



「後編」では、外国ルーツの子どもとその家族に焦点を当て、ポストコロナ・デジタル変革時代の共生社会を見据え、子どもたちが豊かな可能性を実現できる「未来」と「学び」をテーマにウェビナーを開催しました。後編第1回目は、岐阜県可児市の学齢期の外国籍児の就学実態を日本で初めて明らかにした小島さんと、かながわ国際交流財団職員の富本さんのトークセッションを通じて、社会全体で子どもの育ちを支えるためには何が必要かについて学びました。

【新企画】後編では新たな試みとして、ウェビナー終了後に参加者の皆さんと、講師のお二人や日本財団職員も加わり、オンライン交流会を開催しました。参加者からは、とても良かった、参加者どうしがつながることはとても意義のあることだと思ふなどの感想があり、「みんなで」考えることの大切さを感じるウェビナーとなりました。

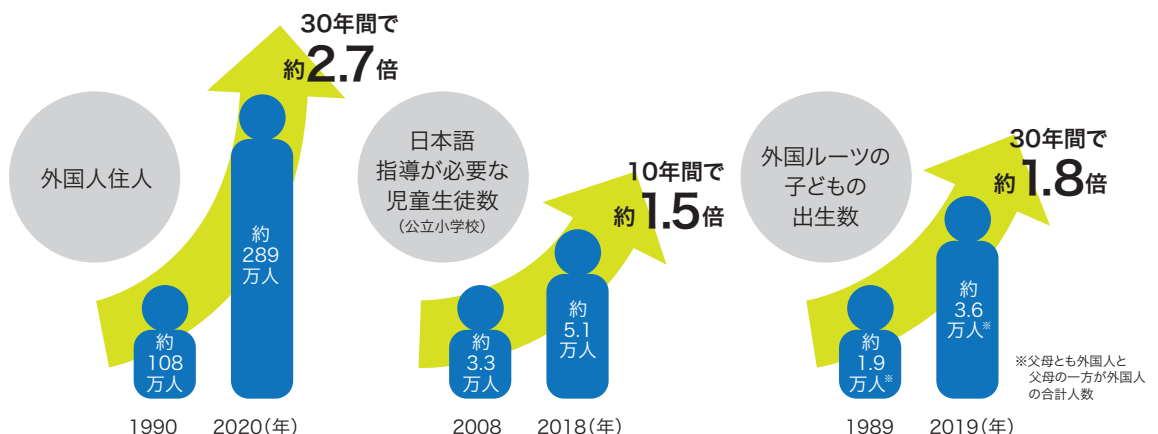


講演内容

30年間を振り返って

1990年に改正入管法で「定住者」の在留資格が認められるようになると、ブラジル、ペルーを中心に多くの日系の人々が家族で来日し、1990年末は約108万人だった外国人住民が、2020年末では約289万人と急激に増加しました※。小島さんは、公立学校で日本語指導が必要な児童生徒数や外国ルーツの子どもの出生数のデータからみえる現状を説明されました。

※法務省の在留外国人統計 2020より



<神奈川県動き>

富本さんは、神奈川県におけるこれまでの取り組みや支援制度などについて、お話しをされました。歴史的にも在日コリアンや中国帰国者、インドシナ難民の人々などが多く住む神奈川県では、地域に住むようになった外国ルーツの家族に対し、まず動いたのは市民でした。多様化する外国ルーツの家族が増える中で、神奈川県はいち早く、1995年に高校進学ガイダンスを開始するなど、さまざまな取り組みが実施されています。



<教育の動き>

講演の中では、日本語指導が必要な児童生徒に関する国の調査や教育における取り組みについてお話があり、特に文科省による虹の架け橋事業をとおりて顕在化した問題に対して各地のNPOや市民団体が活動したことで、外国ルーツの子どもたちの学びに対する国の方針も変わりつつあることを学びました。

子どもたちをどう学びにつなげるか、どう保障するか？



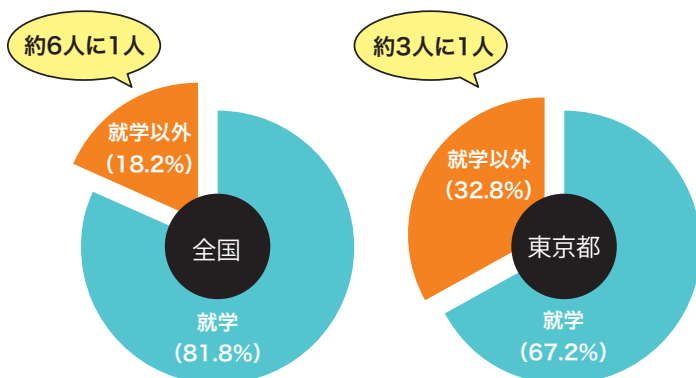
※2008年のリーマン・ショックによる世界的な経済不況の影響で、日系ブラジル人等定住外国人の子どもたちの就学環境が不安定になったことをうけ、2009年政府の緊急支援対策のひとつとして決定された「定住外国人の子どもたちの就学支援事業」。2015年で終了。

講演のポイント

活動からみえること

外国人住民が増加する一方、外国籍者は、就学義務の対象外です。学校に通っていない子どもたちは、社会から見えない子どもとされ、日本国内で長い間、対応されてきませんでした。小島さんは、この問題を解決するため、全国で初めてとなる学齢期の外国籍児の就学実態調査を岐阜県可児市で行い、10万人の総人口の中で4千人の外国人住民、全世帯の子どもたちと対話する中で感じたことについて、お話しをされました。

外国人の子どもの就学状況等調査



2020年、文部科学省が初めて実施した「外国人の子どもの就学状況等調査」の結果（確報値）より

【わかったこと】

- ① 不就学者が実在（初めて判明）
- ② 公立中に通っていたが高校での中退する子どもが多い
- ③ 就学せず、働く子どもの存在

見えない子どもを可視化すること、そして就学につなげることが重要！

子どもたちが安心して大人になるために

小島さん、富本さんからは子どもたちの未来を支えるための重要なポイントについてお話があり、私たちが自分の地域でできることはたくさんあると考えさせられるウェビナーとなりました。

【講師のポイント】

- 1 安心できる場所を学校や地域など社会のいろいろな部分に増やす
- 2 節目節目（入口～出口）での丁寧なサポート
- 3 さまざまな分野で公・民が連携した持続可能な支援や制度
- 4 情報を多言語化するだけでなく、その情報をどう当事者に届けるかを考えること（信頼関係をつくる）

参加者の反応

- 過去30年間のデータから見る状況把握から、現場での課題と対応策の今についてお話いただき大変勉強になった。誰もが安心して過ごせる社会を目指してまだまだできることがあるなと感じた。（神奈川県、NPO関係者）

第2回

外国ルーツの
子どもの学び

開催日時:2021年12月18日(土) 15:00 ~ 17:00 参加者数:261人

田中宝紀さん

(特非)青少年自立援助センター
定住外国人支援事業部責任者

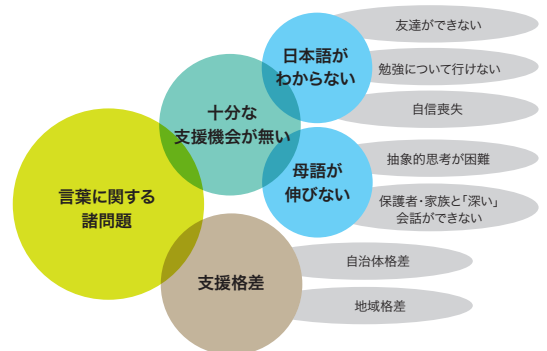
後編の第2回目では、(特非)青少年自立援助センター(以下、YSC)で外国ルーツの子ども・若者のための教育支援事業を運営する田中宝紀さんをお招きして、外国ルーツの子どもたちの日本語教育、教科学習の現状や現場から感じられる課題、オンラインを活用した遠隔教育など新たな取り組みなどについて学びました。



講演内容

言葉にかかわる
現状と諸課題

日本には現在、約51,000人(2018年末時点)の子どもが日本語がわからない状況で学校に在籍しており、うち1万人以上が学校では支援を受けていない無支援の状況にあることがわかっています。田中さんは、日本語を学べない子どもたちが抱えるさまざまな問題に触れ、ただ「日本語がわからない」こと、それが国内で放置されてきたことが、外国ルーツの子どもたちの人生に、長期間にわたり深刻な影響を及ぼしているとお話をされました。また、特有の課題として、日本語だけではなく心身の発達にも影響を及ぼすと言われる母語の育ちの現状についても説明されました。日本語を母語としない子どもの母語教育や母語での教育に関する取り組みは日本では非常に限定的です。加えて、支援の自治体間、地域間格差も深刻で、特に外国人住民が全住民数の1%前後の散在地域における学校では、予算や人材確保の面から、支援の実施が難しいという点もあります。

どんなニーズを持つ子ども・若者でも、
学べる場をつくる

田中さんの運営するYSCでは、支援が必要な子どもの発見から出口まで、直接日本語を教えるような指導職以外にも多文化コーディネーターを配置し、一貫したサポートを行っています。特徴的なのは、日本語が全くわからない児童とつながった際、日本語だけを一定期間集中的に学ぶ時間を設けており、初級レベルの読み書きや、コミュニケーションができるようになってから公立小中学校に行くか、あるいはフリースクールのような場でゆったり学ぶなど、多様なニーズに応じた学びの場がつけられていることです。



- 地域ネットワーク構築・維持
- 広報

誘導

- 相談
- 家庭訪問
- 居場所感の早期確立

参加

- 日本語教育(初期集中)
- 日本語と教科学習の橋渡し
- 学習支援

出口

- 段階的な復学
- 高校進学
- 就労
- 内外リソースへのリファー

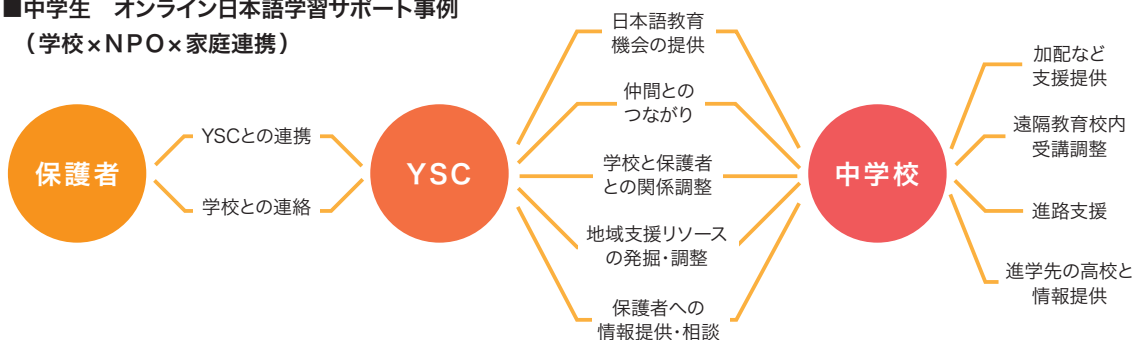
オンライン授業を取り入れ、 無支援をゼロに



YUICHI MORI
NICOプロジェクトの様子(YSC HPより)

2016年からYSCではオンラインでリアルタイムに受講することができる教育支援サービス“NICOプロジェクト”を開始し、ICT活用によって無支援状態の子どもたちを学びにつなげる新たな取り組みが実施されています。同時に、田中さんはオンライン支援だけでなく、できる限り子どもの近くでリアルに子どもや保護者にかかわってくれる地域支援団体を探して、ともにサポートをしていくよう配慮することも重要だと指摘されました。「子どもたちは日本の中で学び、育ち、日本社会に巣立っていく日本の子どもであり、彼らの教育を今こそ、今の大人たちの手で真剣に保障し整備し充実させていかなくてはならない」と田中さんは強調されました。

■中学生 オンライン日本語学習サポート事例 (学校×NPO×家庭連携)



講演のポイント

子どもたちの 未来に向けて

田中さんからは子どもたちの未来に向けて私たちが取り組むべき3つの点についてお話があり、最後にウェビナー参加者に対し、「私たちがやらないと誰も頑張れない分野。今日集まっている261人の方が、一斉に頑張れば、結構なインパクトが出せます。ぜひ、みんなで頑張りましょう!」と力強いメッセージをいただきました。

- ① リアルもオンラインもうまく組み合わせて、言葉の壁をなくしていこう
ICTの活用で新たな支援の創出や、支援が届かなかった子どもたちとつながる
- ② 「誰ひとり、取り残さない」ために、社会資源の“多文化対応”を推進しよう
日本人にとって普通にアクセスが確保されている社会資源の多文化対応を推進することで、海外ルーツの方にもそのアクセスを広げていくことが、子どもの未来を広げる観点からとても重要
- ③ 心の壁を崩そう
日本人の子どもも含めて多様性に配慮するにはどうしたら良いのかなど、みんなで一緒に考え、子どもたちの成長を支える教育として取り組むことが大事

参加者の反応

- 公教育の中ではやりきれないところまでカバーされている活動、素晴らしいと思いました。(静岡県、小学校教員)
- 外国につながる児童への対応の専門性も必要であるものの、理解者を得て課題解決に取り組むためには、「地域」「子ども」「孤立」といったキーワードから考えると良いとのコメントに、視野が広がったような感じがしました。(東京都、NPO関係者)
- わかりやすいうえに、冷静な分析と子どもたちへの愛情と両方が備わった内容で、こちらも頑張らねばと心を動かされました。(会社員)

外国ルーツの子どもたちの学びと未来を 経験談を交え、みんなで考えませんか

開催日時: 2022年1月30日(日) 13:00 ~ 16:15 参加者数: 706人

特別フォーラムでは、外国ルーツの子どもとして日本で育ち、現在活躍しているゲストをお招きし、それぞれの経験談から、「子どもたちの学びと未来のために、私たちにできること」を、一緒に考えました。

講演1

外国ルーツの子どもの学校生活、 今後必要な支援とは

講師: オチャンテ・村井・ロサ・メルセデスさん

桃山学院教育大学人間教育学部 准教授

日系4世のペルー人として、15歳で来日。大学准教授として外国ルーツの子どもが抱えている諸問題の研究に取り組む。専門分野は国際理解教育、ニューカマー児童生徒の教育、キャリア教育。



経験談1

【来日から進学まで】

来日時は、日本語ができないため、定時制高校に入り、授業前や夏休み、取り出しによる日本語の指導や母語による継続的な支援を受けたオチャンテさん。日本語を学ぶ中で、日本語能力試験という目標を作り、学習意欲が高まったそうです。その後、三重県伊賀市にて多言語、母文化に触れられる環境で友達にも恵まれ、支え合える仲間がいたことや、親や周りの支援もあり、日本の高校に進学できました。当時日本語で頻繁にディベートをする機会があったとのことですが、自分の意見を伝える練習になり、今思えばすごく役立ったと語られました。

【大学入学から現在】

日本語でレポートを書けるようになったのは2年生からで、学習言語にも苦労されたとのことですが、大学院を卒業後、5年間、三重県教育委員会外国人児童生徒巡回相談員をし、子どもたちと毎日かわった経験について、お話をされました。今も大学に勤務しながら、伊賀市で暮らし、地域の関係者と連携して、さまざまな活動や情報について発信されています。

【外国ルーツの子どもの課題と支援のポイント】

- いじめを受けた子どもが非常に多く、日本生まれなのに国に帰りたいとか、人種差別を受けるケースがあり、学校と地域が一緒になって、多言語、多文化に触れ合う機会、共生の環境をつくる必要がある。
- 親子のコミュニケーションのためには母語は重要な一方で、子どもたちは母語を使うのが恥ずかしいと感じることが多く、子どもが自分の言語、継承語を使いやすい環境づくりを進めることが重要。
- 日本語指導の先生はカウンセラーの役目も果たしており、子どもは自分が抱えている不安を相談できる。そういう環境も大事にしながら、学校を居心地が良く、楽しく学べる場所にする 것도重要。
- 子どもたちの学校外での支援として、大学生のボランティアも重要。大学生自身も学ぶことが多い。
- 高校の教育制度と卒業後の進路の関係を理解していない家庭が多い。逆に、大学進学者は、早い段階で「なりたい自分」の目標設定をしている若者が多い。褒められることで自信を持ち、進学しやすくなる。
- 将来の日本への投資として、地域を巻き込み、子どもをみんなで支えてほしい。子どもたちが社会に貢献できる大人になるためには、日本語習得の支援が必要。グローバル社会の中で、多様な人材を育てたい。

新たな技術と多様な担い手の連携で築く 『これからの多文化共生』への期待

前編第一回目の講師の田村太郎さんに再登壇いただき、「日本型・ダイバーシティ社会」を考えました。

【ポイント】

- 日本型・ダイバーシティでは、技術を使い、過去の働き方や勉強の仕方、学校そのものを変化させる。多くの新しい支援者が活躍でき、今まで排除されがちだった人が包摂される共生社会を目指す。
- 今は支援者そのものが脆弱になっているが、ICT活用で低コストで支援できる。zoomもYouTubeも無料なので活用の幅が広がる。
- 動画で見れば、何度も再生できる。移動コスト、時間が節約でき、新たなニーズや人材へのアプローチができる。社会人も、海外の人でも、オンラインなら参加ができる。つまり新しい支援者や利用が増える。
- 対象側も、時間、コストが節約できる。ほかの地域、団体の支援を受けられる。特に子どもの場合、親の送迎や教材を購入する負担の問題が、ICTで解決できる。新たな技術をつくり、新たな活動のデザインを期待したい。

経験談2

サヘル・ローズさん

俳優

イラン出身。4歳で親を失い、7歳までイランの孤児院で生活。養子縁組後、1993年に8歳で来日。現在は俳優として活躍中。埼玉県育ち。



【来日時文化、ことばの壁】

来日時、文化のちがいで、ほかの子どもと大きな壁があったサヘルさん。当時の小学校の校長先生は、数カ月かけてサヘルさんに寄り添い、校舎を一緒に歩き、「これは土、これはうさぎ、これは水だよ」と、触らせ、感じさせながら日本語を教えてくれたとのエピソードを語られました。今の日本語ができるようになったのは最初の支援のおかげと話すサヘルさんは、「語学はまず話す楽しさを教え、五感で感じさせることが重要、ノートやドリルは最後で、日本語を教える場合、目を見て、表情やもので教えてほしい。耳を相手に使わせてください」とお話をされました。

【必要な家庭への支援】

経験談の中では、外国ルーツの児童の親も家と勤務先の往復なので、日本のコミュニティの中で居場所を奪われている方が多く、子どもの多くも、これ以上負担をかけられない、兄弟の世話や家事をしないといけないと考え、大学には行かず、働くようになるケースもあるとお話をされました。「外国人の場合、子どもがいじめにあうことをよく話すが、中学時代は国籍を否定され、酷いいじめに3年間あった。子どもたちも悪気がなく、流れてきたイランのニュースを鵜呑みにするので、悪いことばかり言われる。学校では宿題を渡されて家に持って帰っても、親は日本語がわからないので、宿題ができず辛く家でも社会でも居場所がない。現代社会では、なかなか助けてと言えない。大人も困っているケースが少なくない。支援があっても、パイプ役が不在で、制度がわからず、路頭に迷っている人がたくさんいる。まず、大人に支援や制度を教えてほしい」と語られました。

【メッセージ】

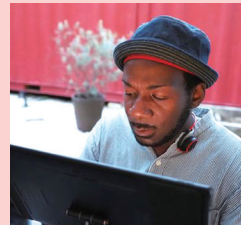
皆さんも外国の人と触れ合うことで、教科書に載っていない、お互いのちがいを楽しむということを再発見してほしい。日本人にない部分を補える人材、日本社会の中で共に生きていく人間として扱ってほしい。

経験談 3

星野ルネさん

漫画家

カメルーン出身。日本人と再婚した母に伴い、4歳で来日し、兵庫県姫路市で育つ。主に多文化共生、多様性などをテーマに自身の体験に基づき漫画にしている。



【子どもの頃を振り返って】

4歳で来日したルネさん。小学校に入学した際、全校生徒がアフリカの生徒がやってきたと教室の前に群がり、すでに日本語がわかるようになっていたルネさんには心の負担となっていたそうですが、その時に、ルネさんを守ってくれたのは保育園で同級生だった友人たちでした。「彼らも出会った頃は、自分のことを奇異な存在として見ていたが、一緒に過ごす中で、同じ人間と実感していった。友人の存在はとても大きい。海外ルーツの子どもは、理解者を得ようと頭で考えるのでは無理で、一緒に遊ぶのが大切。小学校、中学校と上がっていく中で、こうした友人たちのおかげで、本来感じる孤独感、寂しさも、かなり緩和された。過去の思い出が楽しいものが多いのは、そういった友人がいたから」と語られました。「海外にルーツのある人だけでなく、同じ日本人でも育った背景が違う人と会った時は、みんな、さまざまな育ったルーツや背景があると、想像力を膨らませてほしい」という想いで漫画を描いているルネさんは、経験談の中でもご自身の漫画のエピソードをたくさん紹介されました。

【メッセージ】

海外にルーツがある子どもには、自分も物語のピースのうちのひとつで、自分の人生はユニークで面白いと感じてほしいし、自分の持っている可能性をいろいろなところに行って経験してもらいたい。周りの方には子どもにそういうチャンスをあげてほしい、日本社会の価値観の幅を広げられるよう期待している。

パネルディスカッション

外国ルーツの子どもの可能性を広げるために 私たちができることは？

登壇者：サヘル・ローズさん × 星野ルネさん × オチャンテさん × 日本財団 中井（ファシリテーター）



日本財団 中井

こういうサポートがあれば良かった、欲しかったというものは？

僕の場合は、嫌なことを言われた時に助けてくれる友人がたまたまいて助かりましたが、入学した時に、周りの子どもたちは、アフリカ出身の自分に対し、未知との遭遇のようにジロジロと見て、お祭り騒ぎ。外国から来た子どもと共生するための、エチケットの教育がされていれば良かった。



星野ルネさん



オチャンテさん

相手の立場を体験できる機会が欲しい。学生に外国人の子ども目線になってもらい、わからないスペイン語で授業を受けることを実体験する講義を大学で行っています。



サヘル・ローズさん

お互いの文化を知らないからこそ、悪気なく傷つけることも多いです。自分たちの国の発表をして、なぜこれをしてはいけないのかを、子どもたちが話し合える機会があると良いです。



日本財団 中井

日本語学習の思い出を教えてください



オチャンテさん

定時制高校で日本語を一から覚えました。ディベートが多かったのが良かった。日本語は下手だけれど、黒板に絵を描いたりして。自分の考えを相手に伝えたいという気持ちが出てきたから頑張れた。漢字は途中で書くことを諦め、読めるようにすることに専念した。必要に応じ変えることも重要。



星野ルネさん

4歳で日本に来たので、日本語学習をした記憶が全くないです。逆に自分は英語が話せて当たり前という強迫観念があって、英語ができないことがコンプレックスだった。中学校に英語ネイティブの先生が来て、ほかの子にはゆっくり話すのに、僕だけに本気で喋ってくるとか(笑)。



サヘル・ローズさん

小学校では日本語教育の先生がとても褒めてくれ、体験させながら教えてくれた。中学時代は日本語が流暢でも、歴史とかの勉強の科目は全く日本語が追いつかず、なぜ日本に長くいるのにできないと思われるのが辛かった。正解はなく、目の前にいる子が必要とすることを見極める姿勢が必要。



日本財団 中井

母語や家庭での保護者の方との会話はどのような状況ですか？



サヘル・ローズさん

親との母国語の会話は流暢で恥ずかしくないけど、別のイラン人と話す時は自信がなく、言葉が出なくなってしまったり。今も母国語を週1で勉強しています。母国語が話せて当たり前という風潮があって、自分が生まれた大切な場所の言語なので母国語は忘れたくない。



星野ルネさん

4歳で来日してからフランス語の能力は成長していません。親と話しても、語彙数が少なく、言語能力は上がらない。政治討論する家庭は別ですが(笑)。母とは話をしなくても通じ合うから、そこまで会話はしていない。でも、人間社会は言葉が話せないと伝わらないことが多く、自分を表現できない。



オチャンテさん

私は15歳で来日したので、ある程度母語が確立しており、2人とは違う体験かと思います。来日25年後の今、スペイン語のほうが話しやすい時もある一方、中途半端でしゃべっているのではと思う一面もある。でも完璧なバイリンガルでなくても良いと、それほど拘らなくなってきました。



星野ルネさん

完璧でなくて良い。母国語だとしても完璧に日本語をマスターしている人はいませんしね。



日本財団 中井

学校と家庭(保護者)の間のコミュニケーションはどうすれば良いでしょうか？



オチャンテさん

宿題が出されても教えてもらえる場がなく、宿題ができないケースは、みんな体験しており、特に、保護者が日本語ができない家庭ではよくあります。そういう理解はすごく必要で、頑張っていないからだけではなく、学校と保護者との情報共有や、進学の際の学校間の連携が必要だと思います。携帯の翻訳機能も良くなっているし、保護者が翻訳機能を使って話す場面もよく見るようになりました。



サヘル・ローズさん

学校の先生と仕事柄かわかりますが、先生はキャパオーバーで、生徒たちの家庭の教育にも変に口出しができない。宿題をしてくれる団体と、どう連携できるのか学校側もわからない。大切なのは、「先生達ができなければ、うちの団体ができますよ」と言える行政との橋渡しのパイプ役。親も仕事でとても疲れているから、家庭の中に吐き出し口がない。外の受け皿を活用できる組織的な仕組みが欲しい。

うちも父が海外出張でアフリカに行って、母しか家にいないことが多く、外国人は自分たちだけで言葉がわからず、宿題もプリントも読めない状態で、近所の人に助けてもらった。学校と当事者との間の存在、地域コミュニティが重要だけでも、今の社会ではコミュニティが薄くなり、商品や行政サービスに置き換わってしまった。商品にはお金が必要で、行政サービスは法律の枠でしか動けない。



星野ルネさん



日本財団 中井

新しい技術、仕組みを使って、こんなサポートがあればいいのに、というアイデアはありますか？

僕が子どもの時に欲しかったのが、悩みを聞いてくれる人。支援があっても誰に聞けば良いのかわからない。外国人で宿題ができないけど、どうすれば良いですかと聞けば、AIが教えてくれるポータルが欲しいです。それと子どもの頃、アフリカについて、紛争や貧困ばかりでポジティブな情報がありませんでした。お手本になるアフリカ人が導いてくれ、「自分にもチャンスがある」とわかるシステムも欲しいです。



星野ルネさん

日本社会は、どこかでカウンセリングを受けるのは良くないみたいな感覚があり、その人の心の病気とされ、結局、薬を処方されるだけになっています。Withコロナの社会になっていきますが、企業を巻き込み、子どもにタブレットなどを提供し、通信技術、AIを活用するのが必要だと思います。



サヘル・ローズさん



オチャンテさん

子ども支援の現場には予算、人員不足という課題があります。日本財団がオンラインで学習でき、誰でも使え、海外からでもアクセスできる教材を作れば、コストが減ると思います。また、オンラインで子どもどうしが交流でき、ひとりじゃないと思える、参考になる先輩の話聞けるような機会が欲しいです。



日本財団 中井

学校と子どもと支援者をバーチャルな空間でつなぐために、テクノロジーを役立てたいですね。



星野ルネさん

参加者へのメッセージを一言

今、目の前にいるひとりの子どもに寄り添って、ご自身の活動に自信を持ってほしい。皆様が笑顔で自信を持てば、思いは伝わる。ご自身の活動に自信を持ってください。



サヘル・ローズさん

突然日本に来た子どもは、ここに居場所があるかも、将来のこともわからない。ロールモデルや進路の選択肢を見せることで、子どもが真っ暗な道を歩くのではなく、視界が開け、ちゃんと歩ける。



星野ルネさん



オチャンテさん

日本語を学べる場が学校しかない子どもも多く、彼らに自信がつくように、支援者から励ましてほしいです。子どもは認められた、居心地が良いと思えば、日本語の学びを続けてくれる。

編集後記

今回のウェビナー・特別フォーラムでは、現在の日本で、外国ルーツの方々や子どもたちが置かれている状況について、さまざまな視点から講演いただき、参加者どうして理解を深め、ともに考える機会となりました。講師や登壇者の方々の明快な説明と力強いメッセージに多くのヒントや励ましをいただき、改めまして、講演、登壇いただいた皆様、そして、参加いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。



●発行日：2022 年 5 月 31 日

●編集：公益財団法人 日本財団

特定事業部 グローバル・イシューチーム / 公益事業部 審査チーム

〒107-8404 東京都港区赤坂 1-2-2

Tel : 03 -6229 -5111 Fax : 03 -6229 -5110

E-mail : cc @ ps.nippon-foundation.or.jp

